

ルネ・ロッシュフォールについて：「労働の地理学」

遠城, 明雄
九州大学大学院人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/7178827>

出版情報：史淵. 161, pp.59-91, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



ルネ・ロッシュフォールについて

— 「労働の地理学」 —

遠 城 明 雄

はじめに

今日のフランス地理学において、ルネ・ロッシュフォールは1960年代に社会地理学の新たな構想を提起した先駆者の一人として位置づけられている (Frémont et al. 1984; 西村1988; Bouquet 2018) ¹⁾。その研究は同時代においても斬新なものと受け取られており、例えばバッティマーは、法則定立的な空間の地理学と個性記述的な場所の地理学の弁証法あるいは統合を示す研究²⁾として、社会地理学を副題に掲げた E. ジュイヤールの研究³⁾とともにロッシュフォールの研究を挙げているほか (Buttimer 1967)、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの「文明の地理学」を現代世界に応用する試みという評価も与えている (Buttimer 1971)。また A. メニエ (Meynier 1969) も、空間よりも社会諸集団の実践を重視するロッシュフォールの構想について、ハルトケの「社会的休閒」概念との関係⁴⁾にも言及しながら、社会諸関係を経済システムの基盤であると同時に経済機構の結果とし、社会の地域的多様性の解明を目指した P. ジョルジュによる社会経済地理学を、新たな方向性に進める研究であると位置付けた⁵⁾。さらにクラヴァル (1973; 1975) は、その国家博士論文『シチリアにおける労働と労働者 社会地理学研究』(以下、『労働』と略す)⁶⁾について、技術や社会諸関係のみならず民衆の慣習的思考や意識の古層にまで踏み込んで、社会総体の把握を試みた貴重な地域研究と評している⁷⁾。

エリゼ・ルクリュやヴィダル・ド・ラ・ブラーシュ以降のフランス近代地理学において、労働をめぐる諸問題は重要な研究対象であった⁸⁾。例えば、「労働

のリズム」という視角を提起したJ. ブリュース、その影響を受けたJ. シオン（1909）やP. デフォンテーヌ（1932）など、ヴィダル学派のなかでも「異端」に位置する人々の研究を挙げることができるだろう（野澤1996）。シオンは、民衆の労働と生活の現場に対して関心を寄せるなかで、日雇農業労働者の食生活のほか、季節的移動や移住などを論じており、またデフォンテーヌも「労働」を題目に冠した学位論文において、農業、工業と商業、交通など複数の労働と、こうした労働間の循環を議論している。さらに1952年に『人間と大地』を刊行したE. ダルデル（Dardel 1941）が、「経済・社会史研究」を副題にしたパ・ドゥ・カレ地方におけるニシン漁の歴史を取り上げた学位論文の最終章で、機械の導入に伴う伝統的な職人集団から労働者への転換や労働者意識の形成などを議論していることも興味深い。

ただし、労働に焦点を当てて、低開発、社会的不平等、空間的不均等、貧困、歴史意識といった諸問題に正面から取り組み、「社会諸集団と諸空間に関する理論的省察の結果というよりも、社会問題への戦闘的感受性を示す《精神の状態》」（Frémont et al. 1984 : 70）とも評されるロッシュフォールの社会地理学の意義は、当時のフランス地理学界の保守的雰囲気と男性優位の状況のなかで、過小評価されていた時期があり（Racine et Raffestin 1983）、その孤独な営為はフランス社会地理学の「フライング」と表現されることもある（Philo et Söderström 2004 : 98）。こうした状況の背景には、ロッシュフォールが、『地理学年報』などフランスの全国学会誌に論文をあまり発表しなかったことも影響していたのかもしれない（Clout 2021）。

本稿の目的は、ロッシュフォールのシチリア労働研究について若干の紹介と整理を行うことにある。近年、クラウトによるロッシュフォールの評伝が発表されているほか（Clout 2021）、『労働』に関してもフィールドワークの方法と実践という観点から検討が為されているが（Labussière et Aldhuy 2012）、「労働の地理学」（Herod 2001）や低開発という視点から言及されることは少ないように思われる⁹⁾。

以下、ロッシュフォールの「低開発」に関する認識と、それに基づくシチリ

アでの労働とその変化に関する記述を辿ってみることにしたい。ただし、著者はシチリア地域と「低開発地域」に関する地理学、人類学、社会学、経済学などの研究史の知識を持たないため、ロッシュフォールの研究史上の位置づけや記述内容を十分に判断することができない。したがって、本稿はかなり偏った一片の読書ノートに過ぎないことをお断りしておきたい。

1924年にリヨンで生まれたロッシュフォールは、1962年リヨン大学教授となり、2012年同地で死去した。国家博士論文を提出した3人目の女性地理学者であり、J. ボージュ＝ガルニエらとともに、フランス地理学界における女性進出の先駆けとなった人物である（Clout 2021; Ginsburger 2017a,b）。なお本文中の括弧内の数字は『労働』の頁数を示す。

Ⅱ 『労働』の問題構制について

1. 対象と方法

『労働』の内容構成は以下のようなものである。序文で、パレルモの貧困地区で社会調査を行うなど（Rocheft 1958）、社会運動家としてシチリアの貧困撲滅に尽力したダニロ・ドルチ Danilo Dolci は、この作品が外部の人々にシチリアという未知の土地に対する認識をもたらすだけでなく、島民にも島の発展を議論するための前提条件を提供するものであると評価している。

序文

序論「選択理由と方法の諸問題」

第Ⅰ部「いくつかの決定論の問題」

第1章「シチリアの空間」

第2章「シチリアの時間」

第3章「シチリアの諸構造と労働」

第4章「非－労働に直面する労働」

第Ⅱ部「農村地帯における労働」

第1章「農民の歴史と政策」

第2章「労働と技術」

第3章「労働と現代農村社会」

第4章「農村からの移住」

第Ⅲ部「非農村的な諸活動」

第1章「シチリアの漁民たち」

第2章「シチリアにおける工業化の問題」

第3章「労働条件と職人の境遇」

第4章「シチリアにおける第三次活動」

第5章「シチリアの諸都市と労働」

結論「シチリアの低開発と労働のプロブレマティーク」

調査は1954年から59年にかけて、リセ教員の時代は主に休暇を活用し、CNRS 所属になってからはパレルモに2年間滞在して行われた。ロッシュフォールは、指導教員であった M. ル・ラヌーの影響を受けて地中海研究を志すようになり、F. ブローデルの助言を受けてバルカン半島の研究も考えたようだが、最終的にシチリアをフィールドに選択した。彼女は当初、シチリア内陸部の農村地帯における階級構造や農民運動、農業改革などの研究を構想していたが、ル・ラヌーの助言に従ってシチリア全体の労働を調査することになったという¹⁰⁾。調査に際して、農民、労働者、労働組合幹部、行政官、政治家など多様な人々に聞き取りを行っているが、主な情報源はシチリアの女性たちであった。その主な理由は、日中、村にるのが老人と女性だったことにあり、「私は特にフェミニストではない」と断っている (Calbérac 2012)。ただし、『労働』のみならず、ロレーヌ地方にシチリアやサルディーニャから移住し、大規模住宅団地に居住するようになった家族における研究の中でも、女性の労働や日常生活の社会・経済的位置が詳細に描かれている (Rochefort 1963b)。

労働および労働者を研究対象にした理由について、ロッシュフォールは、職業や労働のリズムといった主題が長年地理学の重要な研究対象であったことを

指摘した上で、次のように述べている。

「地理学が、観想的な省察の記録簿や、非専門家が時に道具置き場にさっさと片付けてしまいたくなるような地図の分類カードとなるのではなく、生き生きとした科学にとどまることを欲するならば、労働に関心を持たねばならない（強調は本文）。労働は人間活動のなかの最も重要な形態であり、富の源泉、終わりがなく地表面を変化させ、整備し、傷つけさえする力である。……変容を遂げている現在の文明下で、多くの他の諸科学が、時に有用あるいは無用な幾多の矛盾と紛争のなかで闘っている最中に、地理学もまた危険を冒して、諸結果を記録簿に登録するだけでなく、物の生成に巧みに入り込み、生成しつつある世界の多様な展開を跡付ける、一言でいえば、人間、さらに社会の尺度としての労働をしっかりと把握するように努めねばならない。」(2)。

ロッシュフォールが、「社会的実践としての労働」あるいは「今日の人々が多様な空間のなかで、自分たちの生活を確保するためになんとかやりくりする仕方」(Calbérac 2012)を、新たな一つの研究対象としてではなく、人文地理学の従来の問題構制を批判し、世界の複数性の生成過程それ自体を把握するという、新たな問題構制の鍵として位置付けていたことがわかる。

また当時フランスの社会学者の間で、労働の研究は一種の流行現象になっており、学際的アプローチを重視していたロッシュフォールがそれに惹き寄せられたのは、ある意味当然のことであった。例えば、ロッシュフォールも『労働』で引用し、影響を受けていた G. バランディエの研究が挙げられる。バランディエは1950年代のコンゴ・ブラザビルに関する先駆的な都市研究のなかで、離村者、労働、社会組織と政治活動などを論じており、特に「黒ブラザビルにおける労働の諸問題」の章で、行商人、店舗持ちの小売商、食堂や酒場の主人、仕立屋や美容師などの職人といった「非賃金労働者 *le travailleur non salarié*」の社会・経済的な位置を検討して、この経済活動が「貧弱 *médiocrité*」でありながらも、独自の貨幣流通を創出する可能性がある点や、酒場が公的活動や政治活動の舞台に転換しうることなど、興味深い指摘を行っている (Balandier 1985)。

このほか P. ブルデューが『アルジェリアにおける労働と労働者たち』（1964）を刊行しており（Calbérac 2012）、のちにフランスの社会科学を代表する研究者たちが、植民地での労働問題に深い関心を寄せていたことは、彼らの理論を理解する上でも重要である。

低開発地域に関する研究について、第二次世界大戦以後、植民地支配と独立運動など第三世界をめぐる現実の動向と絡み合いながら、フランスでも1950年代半ば以降、社会科学の中で議論が活発化し、地理学ではロッシュフォールよりも少し若い Y. ラコスト（1926生）などが研究に着手していた（Lacoste 1965）。こうした学的雰囲気において労働と低開発という問題は、まさにロッシュフォールの関心に適した主題であり、地中海の周辺地域における民衆体験を通して、低開発をめぐる問題構制の再考につながったのだろう。

ところで、ロッシュフォールの学際志向は学生時代に遡る。修士論文で15世紀リヨンの農村ブルジョワを研究する一方で、自然地理学にはほとんど関心なかったロッシュフォールは、「社会史」研究から強い影響を受けていた。当時各大学の地理学研究室が共同で行っていたエクスカーションよりも、社会史関係の研究会に参加しており、後年、彼女は社会地理学を「今日の景観の社会史」と呼ぶこともあった（Buttimer 1971, 174）。『労働』の謝辞にも、ル・ラヌー、ジョルジュ、A. アリックスといった地理学者のほかに、ブローデルや G. フリードマンの名前が挙げられており、都市・農村関係に関する学際研究（Friedmann 1951）なども、彼女に影響を与えていたと思われる。

それでは、ロッシュフォールは社会地理学の方法をどのように考えていたのだろうか。隣接諸科学、特に社会学との関係について、重なり合う領域を異なった方法と言葉を持つ複数の学問分野が研究することは、歓迎すべきことであると断った上で、社会地理学の方法上の特徴として次の二点を挙げている。ひとつは、ミクロ分析とマクロ分析の柔軟な「往還」という視点である。『労働』では、身体、農地、「閉鎖的」空間（都市の街区や村落）、シチリア島という自立した政治経済的全体、「開放」空間（国境を跨ぐ人々の交換など）という複数の空間スケールを絶えず往還しながら、類型学的関心（社会学）や「成長の極」

(経済学)といった一般化の議論とも接合を試みることで、労働とその歴史・地理的条件が考察されている¹¹⁾。

もうひとつは、空間の不均質性の視点である。社会地理学の立場からみると、「ひとつのシチリアではなく、複数のシチリアが存在」(4)するのであり、階層、階級、ジェンダー、出身地、都市と農村などによって、その生きられる空間がいかに異なっているか、またそれが集団内・間の社会関係にどういった影響を及ぼすか、を問うことが重要となる。さらにこうした空間の複数性という認識は、それを記述するための方法の再考にもつながった。ロッシュフォールは、自らの調査協力者であった教員や行政関係者、政治家、組合活動家などが、もっぱら統計に依拠して抽象的思考に傾きがちであったと指摘した上で、従来の地理学研究が重視してきた地図及び図表・統計の数値といった量的で抽象的な記号化よりも、言葉を重視し、地理学の言葉は人間の労苦や歓びを想起させ、記述する具体的な言葉でなければならないと考えている。後述するように、特に低開発地域において西洋社会に準拠した統計の分類基準それ自体が現実を把握する上で問題を抱えていたことも、ロッシュフォールがこうしたアプローチを意識するきっかけになったと思われる。

なお、社会地理学と経済地理学の関係について、前者が地表面の改変における人間の諸活動・実践を重視する立場を取るゆえに、「富の生産と循環に配慮する経済地理学とは異なり、社会地理学の関心はまず人間であり、次に空間である」(3)ことをロッシュフォールは強調するが、この視角の相違には、ジョルジュの社会経済分析とル・ラヌーの「住む人 *L'homme habitant* としての人間」の対立(西村1986)が再現されているように思われる。しかし、ロッシュフォールの場合、民衆の社会的実践が社会・経済・政治に変化を生み出す諸状況に着目すると同時に、実践の条件および制約となる諸構造を重視しており、本書を通して「実践と構造の弁証法」とでも呼ぶべき叙述のスタイルが取られている。したがって、彼女の分析はジョルジュとル・ラヌーの対立の構図それ自体の克服として位置づけることができるだろう。

2. 空間と時間

第Ⅰ部では、「決定論」という題目の下に、空間関係や自然条件、歴史の重層性、伝統的・慣習的な思考様式、経済構造、人口動態といった諸問題が論じられている。その意図は、自然条件など物質的次元のみを重視した当時の地理学の研究枠組を批判し、物質と社会関係及び実践や心性など複数の次元の諸関係を検討することで、「決定」をめぐる問題群を定位し直すことにあったと考えられる（Vant 1984）。

第1章「シチリアの空間」の特徴として、気候・降水量・土壌分布・地形などの記述が従来の国家博士論文と比較して少ないのに対して、人間の影響を既に受けた自然の制約に加えて、人間が人間に課す制約、つまり技術による制御と労働配分といった社会的諸関係による制約が重視されている点が挙げられる。例えば、アラブ時代に遡る灌漑は地域社会を豊かにする一方で、地域間や社会集団間の支配と格差を拡大、強化する手段となること、またかつて牧夫が山羊や羊とともに暮らし、山賊たちの活動拠点となっていた山岳地帯の一部が、夏と冬にツーリストを迎える観光地に変貌を遂げつつあることなど、「シチリアにおいて他の場所以上に自然の絶対的な決定は存在」（35）しないことになる。

空間関係についてもその相対性が強調されている。シチリアは古代から地中海世界の交差点に位置していたが、交換と「文明の極」としての機能が停滞することで、イタリアとヨーロッパの「周辺」となり、イタリア本土からの孤立という島嶼性の空間表象のみが、島の内外の人々を強く捉えるようになっていった。

一方、第2章「シチリアの時間」では、「ルノー工場での労働を研究するために十字軍の時代に遡る必要はない」（36）と断りながらも、ギリシャによる植民化以前のシカニ人やシケル人の慣習が脈々と生き続けていることや、ギリシャ人とローマ人など他者による過去の統治が現在の社会構造や労働の慣習・様式に及ぼす影響など、この島の重層的な「文化的異種混成」（37）の歴史が多面的に論じられており、不均質な空間の絡み合いと異質な歴史の重なり合いから、現代を読み解こうとするロッシュフォールの方法を確認することができる。

この章で比較的多くの紙幅が割かれているのが、「イタリアの秩序と無秩序」(44-54)と題された第4節で、その主題は大土地所有制の残存もあって経済が停滞し、社会的不安が高まった19世紀以降に、シチリアの中・上流階級が組織し、シチリア社会を特徴づける存在となったマフィアである。周辺化された地域における在地支配者の権力乱用という現象は世界各地で確認されるが、マフィアの特異な社会関係がシチリアを実質的に支配するようになった要因について、ロッシュフォールは外的と内的の両面から説明する。前者はイタリア統一後の南北の空間的不均等の拡大という経済変動であり、後者はそうした状況においてマフィアが社会・経済的上昇を可能にする唯一の道として民衆に認識されたことや、民衆自身のなかにある「寄生的情実主義」という「シチリア的心性に深く根差した道徳 *éthique*」(46)をマフィアが保持、活用したことである。

「シチリアにおいて労働を研究する際、マフィアを語らないことは不可能である。」(46)と述べられているように、マフィアはその支配力を農園以外にも拡大して、採掘業など複数の労働市場や労務手配などを支配するようになった。外部企業に対して、在地支配人をこの「名誉ある社会」から雇用することを求め、また建設業者には工事が平穏に進むために、この「友人」に税金と同程度の上納金の支払いを強要してきた点など、マフィアは伝統的かつ保守的な社会経済秩序の維持に大きな力を行使したが、その力が顕在化するのとは、労働者の抵抗の弾圧、労働組合の組織化の妨害、農業改革運動や独立運動の阻止などの場面であった。暴力の行使について、ロッシュフォールは1956年と1957年に発生した散弾銃による殺人被害者の地図(50)を提示しながら、処罰されるべき人が処罰されない実態、つまり立件には復讐を恐れる証人や家族の沈黙が壁となり、被告人が起訴された場合でも、証拠不十分で釈放されることが多く、またこうした沈黙は、マフィアの実態を調査することのなかった中央政府や政党にも及んでおり、特にマフィアとキリスト教民主主義勢力が協力と対立の関係にあったことを指摘している。

こうした歴史社会の重みはもちろん時代とともに揺らぎ変化を遂げるが、ロッシュフォールの思考の特徴は、そこに絶えず矛盾を内包した過程を見出してい

る点にあると思われる。例えば、1943年のアメリカ軍上陸による混乱とその後のシチリア独立運動という権力構造の大きな転換のなかで、貧困者に施しを行う一方で、多くの労働組合員を殺害し、自らも1950年にマフィアに殺害された山賊 S. ジュリアーノが、民衆の混沌とした希望を象徴する人物として描かれ(51-53)、また第二次世界大戦後の自治獲得と新たな国家政策の展開は、経済的低開発に付随するシチリアの「政治的低開発」の故に、諸矛盾を再生産することになりかねないと評価されている(54)。

地域社会の新たな可能性の契機が、経済と政治の状況、伝統的な社会諸関係や暗黙の規範に囚われることで、桎梏に転換してしまうという矛盾を内包した過程として地域の変化を記すスタイルは、『労働』を通して一貫している。ここにはロッシュフォールの低開発地域に対する認識のみならず、前述したような、民衆の創造的実践とそれが埋め込まれた歴史 - 地理的過程の弁証法的関係というその認識の方法が表れているといえるだろう。

3. 諸構造と労働

第3章では、シチリアにおける資本主義形成という基本問題が議論されるが、ここで注目すべきことは、ロッシュフォールの「低開発」に対する認識である。「現在のシチリアおよび低開発地域において目撃されている前資本主義から資本主義への変動は、諸構造の見かけ上の類似性にもかかわらず、100年以上前の西ヨーロッパの場合と同様には行われまいだろう」(55) という前提に立っているように、それは単線的な発展史観とは異なるものであった。つまり北アフリカのフランス植民地などと同様に、南部はイタリア統一後から北部によって富を収奪され、北部が発展するための代価を支払った結果、西ヨーロッパというモデルから「遅れた」のではなく、逆の意味での進化(「退行」)を遂げてきたのである(Rochefort 1968)。ロッシュフォールは、外的要因に加えてシチリア内部の各地域の内的要因の相違によって、前資本主義と資本主義の間に一連の中間的な状況・段階が生じると考えており(156)、同時期に発表された G. フランクや A. サミンの議論への言及は見られないが、類似の視点に立って、低開

発を世界規模での空間的不均等発展の複合的過程として分析する方向を提示していたといえるだろう。地域内の構造的要因としては、空間と時間に加えて、以下の要素が挙げられている。

第一は、シチリア内部の「ミクロコスモス」の地域的多様性の存在が経済構造に与える力である。シチリアは、既存の「経済発展の極」とその循環ネットワークの構造により直接的に組み込まれたことで、ローカルな諸条件よりも世界規模の構造に左右されるようになった。ただし、ミクロコスモスがこの循環に不均等な運動を生じさせることで、同一の社会・経済的範疇も場所ごとに異なる意味を持つようになる（56）。

第二は、伝統的な心理・社会的構造の永続性がもたらす拘束性であり、「猜疑心」と「アパシー」の二つが挙げられている。この心理構造によって、他者との関係は協同よりも競争となり、他者の事業に関心を持つ外部の人々はスパイと見なされ、閉ざされた小世界としての家族と家父長制、そして「パトロン（代議士とマフィア）－クライアント関係」が、労働者の連帯とその利益から民衆を遠ざけてきた。

第三は、西ヨーロッパとは異なる時間、法、生と死などをめぐる人々の独特な感覚である。社会・経済状況の重みに直面することで自覚されざるを得ない無力感や識字率の低さもあって、魔術が現実の行為と同等の力を持つと信じられ、言葉としぐさの呪いへの信仰や恐怖も続いていた。これに加えて労働時間の短縮を無意味と捉える時間感覚、生と死の価値の逆転、暴力の容認、複数の文明の混淆としてのキリスト教とその独特な祭りなど、農民社会の「原・文明（archéo-civilisation）」（60）が、労働に対する評価及び労働者の連帯や組合運動などにも独自の性格を与えることになった。ロッシュフォールは、1959年に刊行されたE. ホブズボームの著作（1989）も参照しつつ（Rocheftort 1960）、連帯が時に前合理的・前論理的な性格を強く帯びること、つまり血の契約によって繋がれた極端な情熱と、複雑な状況を忘却し極端に図式的な見方に左右されやすいことなどによって、組合運動の諸条件は先進地域のそれとは必然的に異なるものになると考えている（60）。

最後は人口動態である。19世紀以降、出生率は宗教的・社会的道徳観の影響や農村社会の労働力需要もあって高く推移し、第二次大戦後はイタリアの他地域と同様に出生・死亡率とも減少したが、それでも相対的に高い人口増加率が続いていた。ただし、出生率の最も高い地域は交際や結婚が家族の厳しい監視下に置かれていた農村部では必ずしもなく、パレルモなどの都市部、特に下層プロレタリアの集中する街区であり、ロッシュフォールは「出産を促すのは農村の雰囲気ではなく、貧困であった」(67)と指摘する。

19世紀後半以降の人口移動に関して、内陸農村部から海岸部や都市部へ、さらに海外へと多くの民衆が移動した。海外移民は約166万人で、主な渡航先は、イタリア北部の大都市、チュニジアなどの地中海沿岸諸国、ヨーロッパ、そして北米と南米であった。ニューヨークの移住者のなかには帰国して、パレルモを拠点に麻薬売買を行う者もいたが、マフィアの支配力が強かった山岳地帯の農村社会で不平等な世界を生き、沈黙を強いられていた民衆にとって(Rochefort 1959)、移住は世界に開かれる機会となり、移住者はコミュニティを再構築して、新たな移民の受け皿となると同時に、シチリアに残る親族とつながりを維持し、故郷に金銭と物資を送って生活を支えた。

ただし、ロッシュフォールは、多くの移住者が受入先の社会で最下層に組み込まれ、劣悪な居住環境で生活し、多くの場合に権利を保障されない労働者となったことも強調する。ローマやミラノなどへ移住した人々の場合、その多くが都市郊外のコミュン間のはざまに半分非合法で建設された「小住宅 *micro-maisons*」に住まわざるを得なかった。これらの街区は地元民から「*Corées*」(195)と呼ばれ、周囲とは見えない境界線で画されており、建物を増築した移住者が1階部分を新たな移住者に貸し、街区で市が開催されるとシチリア出身の行商人が集まるなど、地元民との接触は稀であった(196)。こうした環境に置かれた男性移住者の希望は、工場労働者になることだったが、建設業などに就く場合が多かった。ロッシュフォールは男性の失業が続き、女性が繊維工場などに就職した場合、男女間の経済関係の逆転が生じることなど、伝統的社会関係の揺らぎにも注目している。

4. 「労働」と「非・労働」

第4章では、シチリアにおける「労働」概念の確定の難しさという問題が議論される。ロッシュフォールが強調したことは、工業化の進んだ地域と前工業化地域では、労働、雇用、失業といった諸概念の意味が異なる点である。後者の場合、失業と職の少なさの圧力が労働に強い影響を与えることで、労働から失業へ、失業から休業へ、一時的労働から休業へといった異動は、多くの人々にとって大きな転機と捉えられないことが多く、「完全雇用」といった概念はほとんど理解されないのである(80)。またシチリアの場合に、労働は苦痛であると同時に特別な恵みであるという考えが民衆に深く根付いており、それが働くことに対する態度にも影響を及ぼしていた。

一日をおしゃべりとコーヒーで過ごす門番たち *bidelli* の「不生産的活動」、あるいは「クッチョ山の斜面で自ら摘み取った野生植物や冬の牧草地のカエルを街角で売るパレルモの失業者は労働者か」(80) という問いに示されるような、徴税吏には把握されない「収入機会」¹²⁾ の実践、「日雇労働者がオレンジを収穫するため長距離移動をしたが、予想外の降雨で収穫が中断され、賃金を支払われず戻らねばならなかった場合、彼(彼女)らは労働したのかどうか」(81) や、住居からロバで長距離を移動し耕地に着いた時点ですでに疲労しているため、僅かな作業しかできない農民にとっての労働など、複数の異なった状況を取り上げて、ロッシュフォールは「シチリアにおいて久しい間働くこと、それは待つことであり、待つこと、それは働くことであった」(81) という観念が生み出された点に着目する。

統計上は生産人口に含まれるが、日・週・年単位で生産活動に従事していない時間が多い「不完全就業 *sous-occupé*」の状態は、農業労働者のみならず、建設業と鉱山業の労働者や造船所の非正規労働者の場合も、労働と待機の緩慢なリズムによって長時間就業を生じさせていた(92-93)¹³⁾。そして、こうした待機を含めた長時間の拘束に加えて、近代工業部門における求人不足と膨大な失業者の存在が男性労働者への圧力となり、労働者の間に「寄生主義」や「情実主義」がはびこることで、近代的な労働組合運動の発展を妨げるひとつの要因

になった、とロッシュフォールは考えている（93）。

次に失業や不完全雇用といった問題以外で、ロッシュフォールが特に目を向けた「非・労働」が、主婦 *casalinga* の家事労働であった（85-89）。イタリアの他地域と比べて、シチリアはサルディーニャ島と並んで、生産活動人口に占める女性の割合が低かったが、その背景には膨大な男性失業者の存在に加えて、家計は男性が支えるべきという伝統的観念があった。第二次大戦後、こうした観念にも変化が生じたが、大学に通う女性は「放埒な生活」を送っているといった偏見も強く、労働市場と伝統的規範、識字率の低さや妊娠の連続による妊娠期間の長さなど複数の要因が、女性の生産的活動への参加機会を制限しており、むしろ20世紀以降雇用される女性の数は減少していったという。家で待つ女性たち、主婦の仕事になった家事は、約65%の住居で水道設備がないため、遠方の給水場への水汲みと屎尿処理、洗濯と食事の準備は早朝から長時間にわたる重労働となり、これに家畜の世話や見張りなども加わった。

こうした日常生活の制約のなかで、女性たちの近代世界との接触はナイロンストキングなど初歩的なイメージの段階に留まっており、女性たちは新たな事態に恐怖心を抱き、夫の労働組合運動への参加は危険を、移住は孤独を意味するものとして捉えていた。ここで、ロッシュフォールは、ミシンという道具に対する村の女性たちの熱中という現象に着目し、そこに彼女たちの自由への渴望を見出している。かつて村の中流階級の若い女性にとって、都市部の洋裁師の下へ奉公に出ることが、一種の社会的な「通過儀礼」となっていた。この慣習は既に廃れていたが、新たにミシン製造元の関係者が村を訪問して数日間裁断の講習を行うようになり、それに女性が押し寄せたのである。低賃金労働力を目的したミシン販売は、多くの場合に農村家庭の負債となったが、ロッシュフォールはその現実を認めつつも、この情熱が副業収入の確保よりも女性たちの学びへの渴望と機械の所有欲の表れであり、歴史の重圧を克服し、より開かれた精神に至る欲望の潜在的な証言である、と解釈している（89）。

5. 小結

資本主義の形成過程において、先進地域でも労働は複雑な仕方で再編成されてきたが、西洋的視点の自明化とその無批判的な適用が、資本主義に包摂される過程で周辺化された地域での労働の意味やその社会・経済的位置の理解を妨げるものであることは、多くの研究者によって指摘されてきた。ロッシュフォールは、失業者に分類される人々のインフォーマルな収入の獲得の試みや、家事労働を担う女性たちの新たな仕事への取組みなど、こうした自明化によって見えてこなかった諸問題を明らかにすることで、低開発地域のみならず先進地域における労働を理解するための新たな視角を提起したといえるのではないだろうか。

また社会編成とその変化に関して、ロッシュフォールは「決定」の諸次元と、それを再生産すると同時に変化をもたらしうる諸要素、例えば、農民運動や労働運動、組合活動、政治活動、何気ない日常の出来事や民衆の心性と社会的実践の諸関係を、上部構造と下部構造といった二分法ではない仕方で記述しようとしている。特にシチリアにおいて、歴史の重層的過程から生成された暴力を含む支配と従属・自発的服従の諸関係と、複数の空間スケールで作用する諸構造の絡み合いが、民衆の労働と生活により強く作用してきた。この周辺化された地域において、前資本主義（「封建的構造」）からいかに新たな社会変化が生み出されうのか、という問いを、空間と歴史の重みのなかで個人的かつ集合的意識のレベルを踏まえて、動態的かつ微細に検討するロッシュフォールの方法は、「特効薬型」理論（Harvey 2017）とは対極に位置するものであろう。

Ⅲ 「前資本主義」と「資本主義」をめぐって

『労働』の第Ⅱ部と第Ⅲ部では、農村地域と非農村地域における労働の状況が、域外資本の動向や地域内部の差異にも言及されながら詳述されている。農業と牧畜業、漁業から手工業や採掘業、製造業、近代工業、商業やサービス業に至るまで、様々な労働の状況が分析されているが、そこに通底するロッシュ

フォールの基本的関心は、前述したように前資本主義と資本主義の社会編成の特徴と両者の関係あるいは移行である。本章では、ハーヴェイ（2011）による資本主義の進化の軌跡のなかに識別できる7つの「共進化」する「活動領域」（技術と組織形態、社会的諸関係、社会的・行政的諸制度、生産と労働過程、自然との関係、日常生活と種の再生産、世界に関する精神的諸観念）を参考にして、ロッシュフォールの議論の一部を整理する。

まず、ロッシュフォールが農村と都市及びその関係の状況をどのように認識していたのか、を確認する。農村地域では農業資本主義の萌芽が一部で見られるにもかかわらず、統計上は「資本家」にカウントされる不在地主の多さに象徴されるように、従来の社会関係の維持が近代的農業を行うよりも高い利益を生む構造が残存していた。ロッシュフォールによる「前資本主義」の定義は、「農村社会に大変重くのしかかり、封建的な過去に埋め込まれた人間の人間に対する諸関係と従属の総体」であり、自発的ではない様々な「贈答」の慣習や、既成の法や権威に対する巧みで秘密裏のボイコットなど、人々が従うべき「書字化されていないコード」の集合（155-156）というもので、このコードが地代などに影響を与えることで、農民のみならず資本家にとっても強い圧力となった。

都市について、ロッシュフォールは、それが前資本主義的な農業構造に包摂されているため、都市-農村関係はドマンジョンらが明らかにしたような西ヨーロッパのそれとは異なり、農村との差異は機能ではなく、人口規模に過ぎないと評価する（293）。中小都市は行政と商業の中心地であり、建設業や交通業の労働者比率が高いこともあって、「機械革命」の導入にほとんど貢献していなかった。都市の富の多くは生産活動の産物よりも農村から吸収した富で占められ、マフィアの地下経済に依存する場合もあり、その結果、農村の貧困層は期待を抱いてパレルモなど大都市に移動するが、その大部分は近代的産業で職を得ることができず、都市下層社会にはほぼ不可避免的に組み込まれてしまうことになる（309）。

資本主義的發展で中心的役割を果たすことが期待される都市が、その機能を十分に有しておらず、貧困を新たな社会諸関係において再生産する場となって

いたことで、資本主義への不均等発展は矛盾を一層はらんだ過程にならざるを得ない、とロッシュフォールは考えている。

1. 技術と自然への関係

大土地所有制が粗放的農業を残存させている状況を踏まえて、ロッシュフォールは、穀物栽培、非灌漑地域の果樹栽培、灌漑地域、牧畜など作物と地域ごとに、技術の進歩がいかにして労働諸条件と労働量を改善し得るかを議論している（122）。

主要作物の小麦の場合、投げまきや無施肥、小麦作と休閑を反復する輪作など技術が旧来の水準に留まっていたことから、収穫高は芳しくなかった。近代化について、ロッシュフォールはトラクターの導入は土壌流出や失業者の増加など負の影響が大きいとして、輪作への肥料栽培の導入、家畜のさらなる利用、小流域の天水灌漑など在地資源の活用を発展可能性の方策として挙げるが、「伝統はシチリア農民に対して、飼料作物の合理的使用と家畜の近代的飼育を全く準備させていない」（126）と指摘する。

非灌漑農業の変動の鍵となるブドウ栽培については、分益小作制、小土地所有生産者、大土地所有者など生産関係は地域ごとに多様であり、労働者の労働条件や収入も異なっていたが、それが農民の技術と生活水準の改善を可能にしたと評価される。ただし、伝統的なブドウ栽培は、品質や需要の変動、病害などの理由だけでなく、品種を限定したことで消費者の嗜好の変化に対応できず、域外産地との競争で不利な状況に置かれることになった。

なお「技術と心理の面で、土地が繊細で辛抱強い管理を要求することを農民に教えたのはブドウ栽培である」（131）や、エトナ山の斜面上の石積の段畑に関する「貴重な土地は極東の水田における水の如く広がり、鶴嘴で掘る技法は、長い歴史を持つ農学がフォークロア、そしておそらく魔術と結びつく厳密なコードに従っている」（131）といった記述から、技術を物質との相互関係で捉えると同時に、精神世界に埋め込まれたものとして理解しようとするロッシュフォールの思考を読むことができる。

灌漑地域について、伝統的灌漑から1947年に設立されたシチリア電気局によるものまで複数の施設が機能しており、地域的不平等はあったが、オレンジやレモンなど柑橘類の樹園地や野菜栽培を拡大させ、雇用創出と労働条件の改善につながった。ただし水の価格や利用状況は、個人や共同といった土地の所有条件の相違や社会階層に左右され、大土地所有者に水が独占される場合も多く、またパレルモ周辺では水の差配は伝統的にマフィアに選ばれた管理人に任されており、「従順ならざる土地所有者」には水が配分されないなど、社会諸関係に基づく不平等性が重要な問題となっていた（136）。

ロッシュフォールは、技術を常に「人による人の支配」という社会諸関係の問題と結びつけて議論しており、進歩の地域的拡がり不均等なシチリアにおいて、農民が新技術による進歩を実感して「近代化」に信頼を示すようになるためには、すべての農民がその技術にアクセス可能かどうかという問いこそが重要であると考えている（150）。この視点は常識的なものであるが、現在でも一種の技術決定論が人口に膾炙していることもまた確かであり（Harvey2011）、複数の活動領域をつなげるロッシュフォールの方法から汲み取るべきことはまだ多いように思われる。

2. 生産組織と労働条件

a) 農業

ロッシュフォールがまず指摘するのは、前述したような統計が抱える困難である。「迷宮」とも称される農業労働者の階層について、公式統計（1951年）では、独立的労働者、従属的労働者（管理者と使用人、共同労働者 *travailleurs associés*、年契約労働者、日雇労働者）、家族手伝いに三分され（151）、さらに全体の約50%を占める日雇労働者は、年雇用される固定給の労働者から、年間の労働日によって、「常雇」（201日以上）、「慣行」（150-200日）、「臨時」（101-150日）、「例外」（51日-100日）に区分されている。

ただし、小土地所有農や分益小作農のなかにも日雇・季節労働者 *bracciante* よりも酷い生活状況にある者がいること、日雇労働者でも技能を有する壮健な若

年労働者は仕事の選択ができ、また賃金ストライキにも参加できる一方で、日常的に遠距離を移動し、村の広場ではなく畑に直接行ってダンピングされた賃金で働く労働者もいることなど、労働と生活の状況がかなり異なることから(177)、土地所有や占有に基づく経済・法的カテゴリーは重要であるが、あくまで相対的であることが強調される。

従属的労働者が多い理由について、ロッシュフォールは、農業センサスで「資本家」に分類された不在地主による旧来の大農場経営の残存に加えて、一部の地域に出現していた農業資本主義も機械化ではなく、失業者や日雇労働者の圧力を利用し、かつての従属関係を維持することで生産していることを挙げている(154-156)。近代工業の発展が進まず、工業労働者の賃金が農業労働者より安価な場合もある状況が、農業近代化の足枷となり表面上の変化に留めていたのである。

前述のように、資本主義的生産様式が農業を再編する程度は地域で異なり、それが並存していた。例えば、外国人公領の場合、封建制の流動化は表面的で、現実にはその残存以上の状態にあり、伝統と近代は微妙な混淆状態にあった(157)。その一方、二つの地域では「近代化」への動きが始まっていた。ひとつは内陸部と灌漑地域の大土地所有地域で、特に後者では柑橘類栽培の一部で「近代的開発」が進められ、レモン栽培とそれを用いた加工業の共同など、農業資本主義と工業資本主義の連携が生じていた(160)。もうひとつは、職人、商人、自由業など都市小ブルジョワジーが都市周辺の土地を所有して、農村部の経済発展に貢献しうる場合で、ロッシュフォールはこれを「中・小資本主義」(160)と呼称したいと言っているが、資金難を抱えていた。

その他には、小土地所有農の増加をめぐる動きが触れられている(161-171)。その起源は長期賃貸借農に遡り、その数は集約的栽培の拡大とともに増加してきた。ロッシュフォールは、土地の極端な細分化と分散化による移動時間と資源の浪費、税負担、資金不足といった経済・地理的要因と、孤独からくる不安という心理的要因によって、小土地所有農が「脱臼した事業」(166)になっていると指摘する一方で、小土地所有者たちはシチリア農村の転換に大きな役割

を果たし、その土地は変動著しいシチリア農業において、安定のための要素になりうると評価する（170-171）。

低開発地域における「下からの近代化」への動きに共感と期待をもって着目する一方で、その限界を冷静に評価しようとする姿勢は、『労働』を通して見られるもので、ロッシュフォールの思考がここに凝縮されているように思われる。

（b）職人と近代産業

ロッシュフォールは、19世紀までシチリアの職人はイタリア半島の都市部におけるような文化、政治、経済上の役割を果たすことが必ずしもできなかったと考えており、その理由として封建的なものの持続や機械化への対応の遅れなどを挙げている。

1950年代の職人の状況について、都市・農村や部門に応じて差はあるものの、地域の生産・消費活動の変動や域内外の企業との競争により、変化を余儀なくされていた（260-268）。繊維業の場合、家族経営の衰退により女性失業者が増加する一方で、刺繍や絨毯、テーブルクロスなど伝統的特産品は競争力を維持し都市と農村で残存していた（262）。またかつてはおしゃべりとお会いの場として農村社会の口承文化を伝えてきた靴修理職人は、パレルモにおいて4人に3人がプロレタリアートに属し、路上で仕事をするようになっていた（266）。

衰退の理由としてロッシュフォールは、「友愛関係 *fratellanze*」（267）は存続しつつも同業組合が機能しなくなっていたこと、実収入とは釣り合いの悪い税負担、近代的生産サイクルに入るために必要な手段の欠如、顧客吸収力の弱さなどを指摘したうえで、職人と近代工業を有機的に再編することで、優れた職人が自らの分野で卓越した工場労働者になりうることに発展の可能性を求めている（268）。

19世紀以降の工業化は、綿織物業や硫黄採掘業の部門で始まったが、それを核として北部イタリアのような発展のダイナミズムは生み出されなかった。その内的要因として大地主が工業に資本投資を行わなかったこと、また外的要因としてファシズム期に北部大工業の優遇政策が取られたことがあった（226）。

大部分が中小企業であった伝統産業の場合、旧式の道具の利用が続いており、資金不足もあって新たな労働手段の利用は限定的であった。技術水準の低さと弱い法規制、前述した独特な時間感覚などが結びついて、長時間労働が常態化しており、ロッシュフォールは、缶詰工場で長年働き塩水で焼けてしまった老婦人の手や、マスクや手袋、ゴーグルといった基本的道具の不足による硫黄精錬所での半失明といった事例を挙げて、身体と精神を消耗させる劣悪な労働状況を、「ヨーロッパの工業化初期との類似」として認識している（252）。このほかの類似点として、徒弟制による児童労働、契約書を無視した報酬の支払いや不安定雇用、実労働時間の管理や賃金関係書類の曖昧さといった法律の軽視や無視による諸問題、女性労働者の酷使、労働組合員に対する直接・間接の嫌がらせ、資格を持つ専門的労働者を意図的に育成せずに報酬を抑えることなどが挙げられており、低賃金の構造が農業部門と同様に機械化を阻む要因ともなっていた。ロッシュフォールは、労働者の貧困化を資本主義における構造的問題として理解していたといえる。

伝統産業の近代化が停滞する一方で、1950年代の「石油ブーム」による石油関連産業や化学工業について、ロッシュフォールは国内外の企業がシチリアでの経済機能よりも石油の国際流通への配慮を優先させたことから、雇用と税収ともに期待を下回り、ENIの工場や東部沿岸地域に建設された化学コンビナートの場合も、周辺地域の工業成長を促進する極の役割を果たすまでには至らなかったとして否定的な評価を与えている。これらの工場には若者や女性が就職したが、新たな生産工程のリズムに慣れないことから事故も頻発した。その一方で、シチリアの実業家による新たな製造業には一定の可能性を認めるものの、小規模のため地域への波及効果を生じなかったとしている。

さらにこれらの地域開発によって急成長し、新たな雇用の半数を占めた建設業に関して、ロッシュフォールは、その一過性に加えて、非合法の労働市場を肥大化させ、マフィアの手配師や現場監督への日雇労働者の従属状態を強化するなど、危険で不安定な労働条件の再生産につながり、民衆の貧困を悪化させる場合もあるとしている（242-248）。

(d) 第3次産業

工業の発展が進まないなかで、第3次産業の「肥大化」という現象は低開発地域の多くで確認されてきたが、これが地域経済の発展を示すものなのか、それとも失業や不完全雇用の隠れ蓑にすぎないのかが議論的になってきた。ロッシュフォールはシチリアの場合、全体の傾向として後者であることは否定できないとしたうえで、業種ごとに組織化などにも着目しながら、社会変化への影響を論じている。

多種多様な行商人は、「シチリア社会の鍵」(275)として位置付けられているが、その理由は、行商人がシチリア内部における商品循環の仲介者であり、独自のミクロな資金循環を形成していたと同時に、一時的な雇用の受け皿として機能していることにあった。また山で自ら採集した野草や自家製キャラメルなどの販売、農村部で盗んだ卵を自分が住む都市の路上で販売する者、輸入古着、空き瓶、箒などの販売、屑屋など、取り扱う商品や商売に必要な元手と道具は多様であり、こうした諸条件によって中間業者との関係が従属的になるかどうかも異なっていた。ただし、労働者はこの状況に受動的のみならず、能動的に対応し始めており、1959年にパレルモの古紙と襤褸の回収業者が組合の結成に動いている。前科者は組合委員会のメンバーに就くことができないという法律が障壁となって、組合の結成は実現できなかったが、ロッシュフォールは、そこに労働者の権利意識の高まりを認めている(277)。

3. 日常生活と社会的諸関係

ロッシュフォールは、伝統的な農村共同体の特徴として、次の二点を挙げている。ひとつは、「シチリアの農民はしばしば農村的よりも都市的な心性を示す」ことである(101)。社会階層ごとに参加の頻度などは異なるが、広場は映画や野外劇場、組合活動、サークル、寄り合いなど日常生活の重要な構成要素が行われる公共の場であると同時に、日雇労働市場にもなっており、そこでの会話を通じて、様々な情報が共同体の成員に共有されることになった。ただし、こうした「開放性」の背景には、多くの住民が狭い範囲に集住し、狭隘な住居

のなかで収獲物のスペースを確保して、家畜のそばで眠らねばならない現実があった。

もうひとつは、共同体内部に対立が存在した点である。キリスト教が農民家族に深く浸透していたことから、対立は宗教的よりもクランや分業、階級などに基づく社会・政治・経済的分断であり、ロッシュフォールによれば、この点がより同質なサルディーニャ社会などと異なるシチリア農村共同体の特徴であった。

農村での労働を考える上で、ロッシュフォールは農民運動の伝統を重視する(103-109)。農民運動は19世紀末になると、それまでの「自発的騒擾」から変化し始め、社会主義者の影響を受けて一部で組織化され、さらに第二次世界大戦後には諸政治団体、知識人、市民、キリスト教民主主義者らの関与が強まることで、組織化と規律化が進み、暴力の行使などが否定されるようになった。

この時期の農民運動は、基本的に大土地所有制に対する闘争をその共通基盤としていたことで、共同体内部の対立は表面化しなかったが、その背景には農民の「革命的保守主義」(106)とでも呼ぶべき行動様式があったとロッシュフォールは指摘する。すなわち、農民の希望や要求は、どのような形であれ自分の土地の占拠と取得にのみ向かっていたことである。農地管理人の妨害などにより実際の土地の取得が困難であったことから、農民は社会の変革よりもまず個人的な土地の確保に向かっており、ロッシュフォールはそこに運動の限界をみていたように思われる。

戦後の農業改革で地主と分益小作農の配分が見直されたにもかかわらず、その適用が進まなかったことから、「封土」の実力占拠や大行進といった新たな形態の運動が活発化した。この運動も官僚や土地管理人、農村マフィアの激しい抵抗に直面し、多くの組合指導者が殺害される事態に至ったが、日雇労働者がストを繰り返すなど農民は団結してこの暴力に挑戦し、1950年の農業改革法を誕生させるひとつの要因となった(109)。ただし、行政機関による土地の改革と再分配が遅滞した一因が、コミュン間で発生した競争にあり、革命的保守主義は農民の思考と行動を縛っていたといえる。

消費生活について、都市だけでなく農村でも貨幣経済の浸透によって食料品などの自家生産が減少するとともに、低い生活水準ゆえに抑制されていた庶民の消費に対する新たな欲求が、テレビなどの影響によって高まった（273）。ただし、まだ取引が現物支払いや信用支払いであったことで、不作の影響などを受けやすく、貸倒しも多かったことから、消費への欲求が生活関連産業の持続的成長には必ずしも結びつかないと考えられている。

4. 精神的諸観念

これまで見てきたように、ロッシュフォールにとって、古い慣行やそれに根差した民衆の思考と資本主義の関係がひとつの大きな関心であったと考えられる。この問題を象徴的に示す存在となったのが、パレルモの旧市街地と周辺部に集住するルンペン・プロレタリアートであった（311-317）。

宮殿などの施設に隣接した旧市街地の街区には、古くから「貧民 *popolo minuto*」が集住していた。街区ごとに職業構成などは異なっていたが、生産と労働過程および日常生活の共通点として、長期に及ぶ失業状態、石工から靴修理や鍛造工から臓物屋というような頻繁な職業間の異動、自らの専門とは異なる仕事の引き受け、商業・サービス業の多さなどが挙げられる。女性が生産活動を行うことは稀であったが、従事する場合は洗濯や奉公が多かった。また住宅には上下水道の施設などはなく、大家族居住のため狭隘で、その環境は劣悪であった。親族集団のつながりは強く、それは生活の維持につながるが、逆に集団のために個人が犠牲となる側面もあった。こうした状況にあるルンペン・プロレタリアートの精神的観念について、ロッシュフォールは興味深い指摘をしている。

「かつて騒乱を好んだが、王子たちとも親しかった貧民は、20世紀の間に《ルンペン・プロレタリアート》へと徐々に身を落としたが、たいていは以前の権力への礼賛にイデオロギー的に忠実のままである。宮廷のパンくずを拾い集める行為はこの人々にとって、……おそらくいまだに工業労働よりも心をそそり、

尊重すべき行為であるように見える。」(315)

近代イタリアの伝統的都市において、君主や教皇などの統治者と民衆の間には緊張関係と同時に、一種の庇護と忠誠の関係性が存在していたが(307；柴田1983)、このパンくずを集めるという行為の社会・経済的文脈が変化したにもかかわらず、過去の精神世界とつながることで、ルンペン・プロレタリアートは自らを「貧民」として認識し、近代化の体験を解釈することで、その社会的地位を想像的に回復しようとしたのである。

その一方で、この人々には貧苦の現実を別な形式で解釈するもうひとつの逃避先があった。ナイロン、雑誌、テレビといった新たな商品の購入やロットなどの賭け事であり、ルンペン・プロレタリアートは人生の絶頂がある日突然訪れる事を期待した。ルンペン・プロレタリアートは二つのイデオロギーに従っていたわけだが、ロッシュフォールは、概念よりも呪文やジェスチャーが重要となる世界に暮らすことで、精神的なゆとりを得るルンペン・プロレタリアートの姿を通して、「忘却された原文明」(316)に接近できると考えており、この古い世界を理解することで、近代化への「別の道」を見出そうとしていたように思われる。

ただしこの精神世界は、過去の集合的記憶や気晴らしだけで動いていたわけではなく、「生活の根っこ」にある別の要求の影響も受けていた。第一はシチリアの特徴である愛と高慢の下での情熱、第二は信仰、つまり奇跡を待つことの宗教的高揚、第三は社会を前にして果たすべき役割への責任である(317)。ロッシュフォールは、この責任が民衆を労働世界に統合し、シチリアにおける諸構造による決定の影響ともいえるルンペン・プロレタリアートの状況、そしてシチリア全体の問題解決に資するものであると期待しており、後述するように、それを涵養する一つの手段が教育であると考えている。

5. 社会的・行政的諸制度

第二次世界大戦後の農業改革政策とその専門部署として設置された「シチリ

ア農業改革機関 ERAS」について、ロッシュフォールは、諸事業が労働と日常生活や都市－農村関係に一定の改善を及ぼしたことを認めるものの、それが多くの障碍に遭ったことを指摘する（109-121）。特に重要事業であった土地再分配は、「社会正義」（110）に反対する大土地所有者や土地管理人の抵抗と行政機関内部の不作为によって、分配された土地は面積が狭隘でかつ劣等地が多くなり、居住地と耕地間の移動距離も長くなった。さらに水と電気が供給されない住宅や、道路網の整備の不十分さなど、諸政策は近代的な経済活動を展開するために必要な要素を満たすものではなかった。

シチリア内部の行政機関に関しては、官僚制の弊害や「寄生」関係の影響などにより非効率的であり、特に地域圏や市の場合、一部の有力者との癒着とその支配を生む「獵官制」の影響により、近代的機関に必ずしもなりえていない点に加えて、行政よりも強力な統治ネットワークを構築したマフィアと警察の癒着が指摘されている。ロッシュフォールは、こうした公私混同は他の地域や時代でも確認できる現象で、シチリア特有の問題ではないと断りながらも、上述したような社会関係や心性により、それが一層助長されたとみている。なお市役所内部の階級問題（書記や会計とゴミ収集職員）など（283）、組織内部の見過ごしさがちな階級間の齟齬や対立を問題化している点にも、ロッシュフォールの視点の特徴が表れているように思われる。

社会政策、特に教育施設と制度について、現状の高等教育機関は施設が貧弱で教育内容も旧来のものにとどまっており、「シチリアの現実から島のエリートに関心をそらせる」（287）結果を招いていた。それに対して、民衆の偏見も含めた難しい教育環境のなかで、村の若者たちが持つ外の世界への希望に応えようとする若い教員の存在や、芸術家が民衆の古い文明に生命力を見出し、それを自らの創作の糧にしている場合などに、ロッシュフォールは島の現実を変える新たな可能性を見出している。

6. 小結

以上のように、シチリアにおいて土地や水、樹木といった物質、人間、貨幣

など様々な領域で「浪費」(320)が生じており、前資本主義と資本主義及び資本主義の諸部門間で有機的連関が見られず、経済・社会・地理的に「脱臼 *dés-articulation*」状態に陥っていた (Rocheport1968)。ロッシュフォールは、こうした二重経済の状態に起因する現象を「労働の病理 *pathologies*」(320-325)と呼び、失業と就業の頻繁な交替や、労働現場への長い移動といった拘束時間の長い「労働のリズム」、権利と法に基づく諸関係が実現していない「労働諸関係」、適正な雇用の少ない都市への移動など都市・農村の不均衡といった「労働の均衡」などを挙げて、これらの一部を改善しても問題の解決には至らないとしている。

それでは、こうした構造的病理からシチリアはいかにして脱することができるのだろうか。過去との切断を可能しうる外的・内的要素について、北部イタリアによる南部地域の意識的・無意識的な搾取が継続している状況を踏まえながら、ロッシュフォールはいくつかの提案を行っている。例えば、北部の労働者に対しては、北部と南部の「地理的連帯」を (326)、またその開発によってシチリアの状況を悪化させている域外資本家に対しては、地域労働力の積極的雇用、労働者の専門教育の充実、給与機会の拡大、現地での原材料購入を (327)、そして国家に対しては社会政策（夜間学校の増設など）の拡充などをそれぞれ訴えるが、それと同時に彼女が重視したのが、シチリアの指導者そして民衆の精神構造の転換であり、それに基づく行動の可能性と責任である (329)。特に民衆を近代労働に参加させ、世論形成の担い手とするためには、文字と技術などに対する「無知」との戦いが必須となるが、そこで重要となるのが教育の役割である。ロッシュフォールは基本的に近代化と資本主義化を肯定的に捉えているが、「伝統的な価値と心性から暴力的に脱出するのではなく、新たな心性を創出する問題」(332)というように、その実現はシチリア大衆の内面への理解とその現実の分析を踏まえてのみ可能になると考えられていたように思われる。

おわりに

本稿は『労働』の冗長な紹介に終始してしまった。『労働』の学問的位置づけはさらなる検討を要するが、少なくとも1950年代の時代状況において、政治経済的に重要な課題となっていた低開発状態の第三世界という世界資本主義の構造的問題と、歴史学を中心に論争となっていた封建制から資本主義への移行という世界史的問題に関して、『労働』は地理学分野において先駆的研究であり、その視点も独創的なものであったことは確認できたように思われる。また1990年代以降、英語圏地理学を中心に「労働の地理学」という枠組が提起されているが、そこで論点となっているいくつかの問題（Castree2007;Lier 2007;Coe and Jordhus-Lier 2010；2023など）を考える際にも、『労働』を含めた彼女の研究から有益な示唆を引き出すことができるのではないだろうか。

ロッシュフォールは『労働』を刊行の後、社会地理学研究の方法論に関する論放を発表している（Rocheft 1963a,1972,1983,1984）。いずれも短いものであるが、興味深い指摘を含んでおり、例えば、1972年の論文において、社会地理学は社会機能と空間および人間の空間的条件の研究分野とされ、諸社会空間（H.L.M の大規模住宅団地）、諸集団の空間戦略（階級や移民など社会集団ごとの空間利用）、空間の社会的構造化（集団が利用できる諸施設の立地）という三つの方向を通じて、存在の物質的条件と具体的かつローカルな諸空間に関心を寄せる地理学の立場から、環境の理解に貢献できると主張されている。また1984年の報告では、社会地理学者のコンセンサスとして、空間を生産する社会・経済的メカニズム、現実と言説の空間、主体としての人間をそれぞれ重視する姿勢が挙げられている。労働力再生産に注目しつつマルクス主義と人文主義の結合を目指し、国家も含めた空間の「私有化」の乱発に対して、万人に開かれた空間を目指したその社会地理学の視座（Rocheft 1978）についての検討は、他日に期したいと思う。

[付記] 本研究は JSPS 科研費 JP20K01158と JP23K01000の助成を受けたものです。

概要は2023年人文地理学会大会（法政大学，2023年11月26日）で発表した。

注)

- 1) リヨンにおける地理学研究の流れをみると (Vant 1984)、ロッシュフォール以前に社会地理学に関する論攷を発表していた人物として、M. ブロックの影響を受けたA. シャトラン Chatelain が挙げられる。シャトランは第二次世界大戦後、ジョルジュの論攷に触発されて社会地理学（社会学的地理学）の対象や方法に関する研究を発表している。心理的要素に加えて、階級やその他の社会的カテゴリーと個人・集団の社会生活の重要性を論じる分野として社会地理学を位置付けており（1946, 1953）、19世紀以降の社会・経済変動に伴う女性労働の転換（1948）といった研究もある、ただし、ロッシュフォール自身はシャトランの仕事から直接の影響は受けていないと発言している（Rocheft 1983）。
- 2) M. サントス（1971）も同様の視点から、自著のエピグラフでロッシュフォールの言葉を引用している。
- 3) ジュイヤールによるロッシュフォールの研究の評価について、Juillard（1964）を参照のこと。
- 4) ハルトケのロッシュフォールに対する影響については Ginsburger（2015）も参照のこと。
- 5) 第二次世界大戦後、ジョルジュのほか、J. ゴットマンや M. ソールらが生活様式概念の批判的展開と近・現代社会への適用を試みており（野澤1988）、ジョルジュが生活様式の物質面に関心を集中させたのに対して、ゴットマンは象徴の力の重要性にも言及するなど、「上部構造」と「土台」の関係が議論されていたと言える。ロッシュフォールは、「低開発地域」における「前・資本主義」と「資本主義」、「伝統社会」と「近代的産業構造」の競争と相互依存という問題設定において、環境と諸社会集団の関係の類型化にとどまらず、社会諸関係や構造と人間の社会的実践としての労働や民衆の心性の相互規定な関係に着目することで、生活様式概念の活性化を行ったといえるかもしれない。
- 6) 出版社の意向により題目が『シチリアにおける労働』に変更されたという（Calbérac 2012）。なお2005年にイタリア語訳（『シチリアの500年 労働・文化・社会』）が出版されている。
- 7) 近年でも「低開発 sous-développement」地域における労働問題を研究の中心に据えることで、伝統的な地域モノグラフの枠組みを刷新する意志を示した作品という評価を受けている（Blanchard et al.2021）。なおフランスの農村地理学研究におけるロッシュフォールの位置については、手塚（1980）を参照のこと。
- 8) ヴィダル（1910）も、資本主義下で中小業者が大資本に対抗するための方法として、「アソシエーション」の可能性と限界に触れており、資本主義の形成過程における労働条件や組織の変化に関心を持っていたと考えられる（Onjo 2021）。
- 9) 例えば、フランスとイタリアの地理学者による社会地理学の会議で、「地理学と労働」という報告を行ったタブシ（Tabusi 2011）は、1920年代以降のイタリアにおける労働の地理

学研究を紹介した後、1980年代以降のアングロ・サクソン圏の動向を取り上げており、ロッシュフォールへの言及はない。

- 10) ル・ラヌーから方法論に関する助言は一切もらわなかったと語っているように (Calbérac 2012)、両者の関係は微妙だったようで、特に68年5月革命を境にその関係は疎遠になったという (Clout 2021)。
- 11) ミクロスケールの場合、部屋の壁に掛けられた絵や写真までが含まれるが、ロッシュフォール自身は街区スケールでの研究が最も実り豊かであると考えていたように思われる。「確かに、たとえば H. ルフェーブルや R. ルドゥリューといった社会学者たちは、街区 (カルティエ) のモノグラフにもはや関心を持たないように思われる。なぜなら彼らは、街区の自立性 (自治) を否定して、たとえ住民が都市圏にもつ知覚が断片的であるとしても、都市圏はその全体において考察されるべきであると考えているためである。しかし、具体的なものと生きられたものが最も恵まれている点で、社会地理学はこのスケール (街区) で生活と環境の質を、下水渠と汚物の堆積から人々の行動にいたるまで分析し続ける必要があり、これらの調査は統計や観察の寄与を補足しうるものであるように思われる。」 (Rochefort 1972:400)
- 12) 経済人類学者の K. ハートが、ガーナの首都アクラのニマ地区におけるフィールド調査から「インフォーマルな収入機会」という概念を提示して、「失業問題」に別の観点を導入したのは1960年代後半のことである (遠城1999)。
- 13) 失業者とその変動については、大きく三つに類型化されている (91-92)。第一は季節型で、特に農業部門に顕著で地域差はあるが、概ね7月から8月にかけて減少し、1月と2月に最多となる。第二は周期型で、作物需要や鉱産資源市場の状況と結びついて生じる現象である。最後の構造型は、主に投資や経済発展と人口増加のリズムの不均等に起因するもので、機械化による労働供給量の変化や資本主義部門の成長による前資本主義的秩序の動揺というより根本的な経済構造の転換がその原因となっている。

文献

- 遠城明雄 1999. ガーナにおける〈都市インフォーマルセクター〉および〈小規模企業〉研究について. 人間科学5: 63-84.
- クラヴァル, P. (竹内啓一訳) 1975. 『現代地理学の論理』大明堂.
- 柴田三千雄 1983. 『近代世界と民衆運動』岩波書店.
- 手塚 章 1980. フランスにおける農村地理学の動向. 地学雑誌89 (5): 25-41.
- 西村孝彦 1986. モーリス・ル・ラヌー再考. 水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視圈』大明堂, 39-49.
- 西村孝彦 1988. ジュール・シオン考. 金沢大学文学部地理学報告4: 83-110.
- 野澤秀樹 1988. 生活様式論をめぐる諸問題——生活様式概念の活性化のために——. 史淵 125: 179-206.

- 野澤秀樹 1996. 『フランス地理学の群像』 地人書房.
- ホブズボーム, E.J. (水田洋・安川悦子・堀田誠三訳) 1989. 『素朴な反逆者たち』 社会思想社.
- Blanchard, S., Estebanez, J. et Ripoll, F. 2021. *Géographie sociale*. Paris : Armand Colin.
- Balandier, G. 1985. *Sociologie des Brazzavilles noires*. Paris:Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques. 2^e édition (1^{re} édition, 1955).
- Bouquet, Y. 2018. *Géographes et géographies. De la connaissance de la terre à la compréhension des territoires*. Dijon: EUD.
- Buttimer, A.1967. Réflexions sur la géographie sociale. *Bulletin de la Société Géographique de Liège* 3:27-49.
- Buttimer, A.1971. *Society and Milieu in the French Geographic Tradition*. Chicago:Rand McNally and Comapny.
- Calbérac, Y.2012. «Ce qui m'intéresse dans ma démarche, c'est moins le cadre que les gens» Entretien avec Renée Rochefort. *Géocarrefour* 87: 283-291.
- Castree, N. 2007. Labor Geography: A Work in Progress. *International Journal of Urban and Regional Research* 31: 853-862.
- Chatelain, A. 1946. Cette nouvelle venue : la géographie sociale. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 1: 266-270.
- Chatelain, A. 1948. De la géographie psychologique à la géographie du travail. *Cahiers Internationaux de Sociologie* 5: 158-164.
- Chatelain, A. 1953. Horizons de la géographie sociologique. *Revue de Géographie de Lyon* 28: 225-228.
- Claval, P. 1973. *Principes de géographie sociale*. Paris: Editions M.-Th. Génin.
- Clout, H. 2021. René Rochefort (1924-2012). In *Geographers: Biobibliographical Studies* 39, eds. E.Baigent and A.R.Novae, 143-167. London: Bloomsbury Academic.
- Coe, N. and Jordhus-Lier, D.2010.Re-embedding the Agency of Labour. In *Missing Links in Labour Geography*, ed. A.Bergene,S.Endresen, and H.Knutsen, 29-40. London and New York: Routledge.
- Coe, N. and Jordhus-Lier, D.2023.The multiple geographies of constrained labor agency. *Progress in Human Geography* 47 : 533-554.
- Dardel, E. 1941. *La pêche harenguière en France. Étude d'histoire économique et sociale*. Paris : André Tournon et Cie.
- Deffontaines, P. 1932. *Les hommes et leurs travaux dans les pays de la Moyenne Garonne*. Lille : S.I.L.I.C.
- Fremont, A. Chevalier, J. Hérin, R. et Renard, J. 1984. *Géographie sociale*. Paris: Masson.
- Friedmann, G. éd. 1951. *Villes et Campagnes. Civilisation urbaine et civilisation rurale en France*. Paris: Armand Colin.
- Ginsburger, N. 2015. Géographies sociales et appliquées, entre regards croisés et circulations

- universitaires : Wolfgang Hartke, les géographes français et les relations académiques franco-allemandes au XX^e siècle. *Cybergeo : European Journal of Geography* [En ligne], Epistémologie, Histoire de la Géographie, Didactique, document 746. URL: <http://journals.openedition.org/cybergeo/27271>; Doi: <https://doi.org/10.4000/cybergeo.27271>
- Ginsburger, N. 2017a. Portrait en groupe de femmes-géographes. La féminisation du champ disciplinaire au milieu du XX^e siècle, entre effets de contexte et de structure (1938-1960). *Annales de Géographie* 713 : 107-133.
- Ginsburger, N. 2017b. Femmes en géographie au temps des changements. Féminisation et féminisme dans le champ disciplinaire français et international (1960-1990). *L'Espace Géographique* 46 : 236-265.
- Harvey, D. 2011. *The Enigma of Capital*. London: Profile Books. ハーヴェイ, D. 著, 森田成也ほか訳 2012 『資本の〈謎〉』 作品社.
- Harvey, D. 2017. Marx, Capital and the Madness of Economic Reason. London: Profile Books. ハーヴェイ, D. 著, 大屋定晴監訳 2019 『経済的理性の狂気』 作品社.
- Heord, A. 2001. *Labor Geographies. Workers and the Landscapes of Capitalism*. New York: Guilford Press.
- Juillard, E. 1964. À propos de deux thèses méditerranéennes : Géographie rétrospective et géographie prospective. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 19 : 586-592.
- Labussière, O. et Aldhuy, J. 2012. Le terrain ? C'est ce qui résiste. Réflexion sur la portée cognitive de l'expérience sensible en géographie. *Annales de Géographie* 687-688 : 583-599.
- Lacoste, Y. 1965. *Géographie du sous-développement*. Paris: PUF.
- Lier, D. 2007. Places of work, scales of organising : A Review of Labor Geography. *Geography Compass* 1 : 814-833.
- Meynier, A. 1969. *Histoire de la pensée géographique en France (1872-1969)*. Paris: PUF.
- Onjo, A. 2021. Sur la «modernisation» de pays non-européens : L'Asie dans la pensée géographique de Vidal de la Blache. *Cahiers de Géographie de Québec* 66, n°184-185 : 81-94.
- Philo, C. et Söderström, O. 2004. La géographie sociale : la société dans son espace. In *Horizons géographiques*, eds. G. Benko et U. Strohmayr, Paris: Bréal, 75-149.
- Racine, J.-B. et Raffestin, C. 1983. L'espace et la société dans la géographie sociale francophone : Pour une approche critique du quotidien. In *Espace et localisation*, eds. J. Paelinck et A. Salles, Paris : Economica, 304-330.
- Rochefort, R. 1958. Les bas-fonds de Palerme, d'après l'enquête de Danilo Dolci. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 13 : 349-358
- Rochefort, R. 1959. Un pays du Latifondo sicilien: Corleone. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisation* 14: 441-460.
- Rochefort, R. 1960. Les révoltes populaires: une tradition? *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 15 : 1206-1207

- Rocheftort, R. 1961. *Le travail en Sicile*. Paris: P.U.F..
- Rocheftort, R. 1963a. Géographie sociale et sciences humaines. *Bulletin de l'Association de Géographes Français* 40 : 18-32.
- Rocheftort, R.1963b. Sardes et Siciliens dans les grands ensembles des Charbonnages de Lorraine. *Annales de Géographie* 72 : 272-302
- Rocheftort, R. 1968. La géographie du sous-développement vue de la Méditerranée, *Bulletin de l'Association de Géographes Français* 45, 83-89.
- Rocheftort, R. 1972. Géographie sociale et environnement. In *La Pensée géographique française contemporaine: Mélanges offerts à A. Meynier*, 395-405. Saint-Brieuc: Presses Universitaires de Bretagne.
- Rocheftort, R. 1978. Espace et justice sociale. *L'Espace géographique* 4 : 307-309.
- Rocheftort, R. 1983. Réflexions liminaires sur la géographie sociale. In *Géographie sociale. Actes du Colloque de Lyon*, 14-16 October 1982, éd., D.Noin, 11-15.
- Rocheftort, R. 1984. Pourquoi la géographie sociale? In *De la géographie urbaine à la géographie sociale. Sens et non-sens de l'espace*, Collectif français de géographie urbaine et sociale, 13-17. Paris.
- Rocheftort, R., A cura di M.G.Giacomarra.2005. *Sicilia anni Cinquanta. Lavoro cultura società*. Palermo: Sellerio editore.
- Santos, M. 1971. *Le métier de géographie en pays sous-développé*. Paris: Éditions OPHRYS.
- Sion, J.1909. *Les paysans de la Normandie orientale :Pays de Caux, Bray, Vexin Normand, Vallée de la Seine, étude géographique*. Paris: Armand Colin.
- Tabusi, M.2011. Géographie et travail. In *Pour une géographie sociale. Regards croisés France-Italie*, dir. I. Dumont, 61-78. Caen : P.U.C..
- Vant, A. 1984. La géographie sociale lyonnaise en perspective. *Revue de Géographie de Lyon* 59 : 131-146.
- Vidal de la Blache, P. 1910. Régions françaises. *Revue de Paris* 17(6) : 821-849.